

口腔乾燥症

2012年1月

今号のテーマは口腔乾燥症、すなわちドライマウスです。新潟病院にはドライマウスの専門外来があり、必要があって既に診察をお受けの方も多いと思います。

ドライマウスの典型は右写真のように舌の粘膜が乾いて深い溝ができます。症状は痛み、ざらつき感、乾燥感、ネバネバ感、咀嚼嚥下異常、飲水切望感、味覚異常が認められます。また、カークネスによって口の乾きは睡眠時無呼吸症候群を悪化させることが証明されております（左図）。

原因は薬物による副作用が多いのですが、中にはシェーグレンといった膠原病が原因のこともあります。私たちの調査では、鼻閉と生体リズム（体内時計）の後退も一因でした。生体リズムで体が夜と認識している時間（深部体温下降期）には唾液の分泌量は低下し、それに伴って口腔や咽頭の粘膜は乾燥してしまいます。鼻閉については鼻閉があるから口呼吸となって口が乾くといった単純な因果関係ではなく、口が乾く現象と同じく鼻粘膜も乾く結果、鼻閉が生じる可能性もあります。そのため、鼻粘膜用の保湿剤（ハナクリーン）も開発されております。

